

## 表紙・裏表紙の写真の説明

表紙・裏表紙ともに

撮 影 地：中華人民共和国・北京市・頤和園

撮 影 日：2007年6月28日

撮影データ：

表 紙 オリンパス E-410/ズイコーデジタル11-22mm F2.8-3.5 (焦点距離：22mm)/絞り優先オート (F5.6・1/125秒)/記録画素数：3648×2736・JPEG/ISO：200/ホワイトバランス：オート

裏表紙 オリンパス E-410/ズイコーデジタル11-22mm F2.8-3.5 (焦点距離：11mm)/絞り優先オート (F8・1/250秒)/記録画素数：3648×2736・JPEG/ISO：200/ホワイトバランス：オート

コ メ ント：今回も前回に引き続き、表紙・裏表紙ともに広角レンズで揃えてみました。フィルムカメラの35mm判に換算して22～44mm相当の2倍広角ズームレンズによる撮影です。最近ではデジタル一眼レフでも10倍以上の高倍率ズームが一般化してきており、ズーム比の小さなレンズはあまり人気がないようですが、広角ズームに関しては2倍前後のズーム比のタイプが各社からラインナップされています。広角レンズはわずかな焦点距離の差で著しく遠近感が変わるので、カバーできる焦点距離の範囲が少なくても、目の前の被写体に対して、はじめからどの焦点距離でどのような画面構成にしようか決めて撮影する場合には、ズーム比が小さくても使い勝手の上であまり大きな問題にならないからです。もっとも、高倍率ズームレンズで、ファインダーや液晶ビュー画面を見ながら焦点距離をダイナミックに変化させて撮影することも、面白いと感じますが……(本誌中の挿入写真の何枚かは18倍ズームレンズのコンパクトデジタルカメラによるものです)。ズーム比の小さいレンズのメリットのひとつとして、画像の立体感が豊かという傾向があるようです。最近の高倍率ズームもピントのあった部分の解像度には素晴らしいものがあります。しかし、ピントのあった部分とその前後でボケていく変化の度合い次第で、被写体が立体的に見えるか、平板に見えるか、得られた画像において結構な違いが出てくるようです。銀塩(フィルム)カメラが主流だった頃にはそのような議論もよく耳にしましたが、そうした経緯を知っていると、写真に解像感よりも立体感を求めてしまうのかも知れません。

本誌中の写真の使用機材

ボ デ ィ：オリンパス E-410、E-500、SP-550UZ

レ ン ズ：ズイコーデジタル ED50mm F2.0マクロ、ズイコーデジタル11-22mm F2.8-3.5、ズイコーデジタル14-54mm F2.8-3.5、オリンパス ED レンズ 4.7-84.2mm F2.8-4.5

撮 影 者：林 孝文 (2007年8月29日 記)